

研究動向

エックハルト研究の新しい動向

中山善樹

1. 筆者は1987年から1989年まで、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨励研究員として、主としてエックハルトのラテン文テキストを研究するために、ケルン大学トマス研究所に滞在した。トマス研究所では、エックハルト批判的校訂版全集の編纂者の一人である Albert Zimmermann 教授に師事した。以下においては、その機会に見聞したことを混じえて、目下のところは、エックハルトのラテン文テキストの思想史的研究では、最先端に位置すると思われる Kurt Flasch 教授を中心とするポッフム大学の研究グループの成果の一端を紹介するとともに、若干の検討を試みたい¹⁾。

2. まずラテン文テキストの最近の編纂状況であるが、それについて Zimmermann 教授に問うてみたところ、批判的校訂版全集ラテン文テキストの編纂者の一人であるイタリア人の Loris Sturlese 博士を紹介された。同氏はピサの Scuola Normale Superiore に所属する研究員であるが、もっぱらドイツの中世哲学のヒストリーリッシュな研究に従事しており、ポッフム大学の研究グループの一員に加わっている。同氏は1948年生まれの手若手であるが、その実力はつとに知られ、後述の *Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi* に責任編纂者として、Flasch 教授とともに名を連ねており、1985年から86年にかけてフンボルト財団奨励研究員としても活躍している。私が訪問したときは、ハノーヴァー近郊のヴォルフェンビュテルにあるヘアツォーク・アウグスト図書館において、ラテン文テキスト第五巻第3-4分冊の最終校正にあたった。

同氏は1985年にオックスフォード大学のボードリアン図書館から、著者名も題名も記していないエックハルトのラテン文テキストの新しい写本 (Cod. Oxoniensis Bodleiani Laud misc. 222) を発見した。この写本は従来のものとは編纂が異なるもので

あり、ほぼ十四世紀後半のものであると推定されるが、従来のものとは異なる多くの異文を含んでいる。それらの異文は、特に『創世記譬喩解』(*Liber Parabolae Genesis*)のより十全な読解のために資するところが大きであるとコメントされている。また同氏の語るところによれば、この写本は、『創世記譬喩解』、そして従来知られていなかった『創世記譬喩解』のためのインデックス、『三部作序文』(*Prologi in Opus tripartitum*)、そして最後にこの順序で『創世記注解』(*Expositio Libri Genesis*)を含んでいる。このことは従来考えられていたように、『創世記譬喩解』が『創世記注解』の単なる付録ではなく、それ自体独立した作品であることを示していると言われる。

しかし私見によれば、エックハルトのラテン文テキスト全体に散見される『創世記譬喩解』に対する“*secunda editio*”という表示は、どうしても『創世記譬喩解』が『創世記注解』に比して二次的なものではないかという疑問を起こさせる。しかしいづれにしても、この発見によって、従来軽視されがちであった『創世記譬喩解』は、新しいテキストでもう一度検討される必要性が生じてきたわけである。このテキストはラテン文テキスト第一巻の二部として、その第1-2分冊が1987年に刊行されている²⁾。

さらに同氏は、翌1988年には、ラテン文テキスト第五巻第3-4分冊を刊行した。その内容は、(1)1294年の復活祭にパリで行われた説教(*Sermo Paschalis a. 1294 Parisius habitus*)、(2)エックハルトの生涯の事蹟(*Acta et regesta vitam magistri Echardi illustrantia*)、(3)エックハルトの審問関係の書類(*Processus contra magistrum Echardum*)の三点から構成されている³⁾。

まずセルモは、クレーメンスマュンスターの市立図書館の手稿から編纂されたものであるが、すでに1957年に、Th. Kaeppliはその手稿の存在を指摘するとともに、その内容についても詳細な分析を試み⁴⁾、爾来、Heribert Fischerがその死に至るまで、その批判的校訂作業に従事してきたものである。今回はそのテキストに注が付され、Fischerが従事していた独訳が掲載されている。このテキストはエックハルトの最初のセルモであるばかりではなく、その前年に行われた『命題集コラチオ』(*Collatio in Libros Sententiarum*)と並んで、エックハルトのおそらく最も初期の文献であることは間違いない。エックハルトは命題集講師(*lector Sententiarum*)として、1294年3月28日の復活祭に、その教職活動の一貫としてパリ大学神学部において、このセ

ルモを行ったものと推定されている。この点で教化を目的とした中高ドイツ文説教とは、根本的に性格の異なるものである。しかしこのセルモにおいては、典拠は正確に挙げられているものの、その引用の内容は原典とは相当に隔たりのある場合もある。このテキストがエックハルトの自筆によるものではないだけに、それがエックハルト自身に帰せられるのか、筆記者によるものかは定かではない。

セルモの冒頭には、聖書からアウクトリタス、「キリストがわれわれの過ぎ越しの子羊として生贄にされた」(Pascha nostrum immolatus est Christus) (I コリント, 5,7) が挙げられ、それがさまざまな仕方で解釈されることによって、そのセルモの主題である「謙遜」が説かれる仕組みになっており、この形式は、当時のセルモの習慣に則ったものである。注目すべきことは、このセルモのなかに、アルベルトゥスがしばしば語ったとされる言葉が引用されていることである (Albertus saepe dicebat: hoc scio sicut scimus, nam omnes parum scimus)。このことは、従来から推定されていたように、1280 年頃 (アルベルトゥスの死の年)、エックハルトは、当時アルベルトゥスが学頭をしていたケルンの *studium generale* で、最晩年のアルベルトゥスの警咳に触れえたことを示すと同時に、Sturlese 博士によると、エックハルトが後述のアルベルトゥス学派に属するという公的な告白の標であるとも理解できるとされている⁵⁾。いずれにしても、このテキストはエックハルトの最も初期の思想を知るうえで欠かすことのできないものであろう。

つぎに第二のエックハルトの生涯の事蹟についてであるが、Sturlese 博士はここでは、エックハルトの伝記的研究において従来、最も信頼おける成果をもたらしたとされている Koch の研究に依拠している。もちろんその他に、もろもろの証書、書簡、会議録、同時代の証言、写本の欄外注、審問関係の書類などを、編纂に際しては用い、そこから得られた事蹟の記録を 67 箇条に分けて報告している。そのうち今回、刊行されたのは、47 箇条までである。そのうち従来の諸研究と比して、筆者の目に止まったことを報告しておきたい。

まず第一に、従来 Denifle 以来、Koch の批判的研究においても、エックハルトの生地は、現在の東独のテューリンゲン地方に位置するエアフルトないしゴータの近郊のホッホハイムであるとされてきたが⁶⁾、それはエックハルトが 1302/03 年に行った『聖アウグスティヌスの日にパリで行われた説教』(*Sermo die b. Augustini Parisius*

habitus) の末尾に記されている “Iste sermo sic est reportatus ab ore magistri Echardi de Hochheim, die beati Augustini, Parisius” という記載に基づいてのことであった。ところが今回、この定説が覆され、E. Albrecht の新説が採用された⁷⁾。それによれば、従来生地を示すとされた “de Hochheim” なる表記は、姓名の表示であるとされている。エックハルトは、タムバッハ (Tambach) かその近郊に居を構えていた下級貴族の末裔にあたり、“Eckhart” という伝統的な名を用いていた家系に属すると推定されている。

エックハルトの生年月日については、従来どおり知られていない。ただ 1293年に、命題集講師としてパリに派遣されたとき、少なくとも33才であったことから、1260年以前であることが推定されている。また Koch の批判的研究でも、記載されていた 1277年に、エックハルトがパリ大学人文学部 (*artes*) に学生として派遣されていたこと、1280年頃に、ケルンの *studium generale* で神学の勉学を始めたことは⁸⁾、いずれも今回は記載から除外されている。若きエックハルトの事蹟として記載されているのは、1293年に行われた『命題集コラチオ』と翌年に行われた『1294年の復活祭にパリで行われた説教』のみである。

最後に審問関係の書類について一言しておこう。ここには、1325年8月1日と1326年9月26日の間に、異端の嫌疑で、Hermann von Summo と Wilhelm von Nidecke がケルンの大司教 Heinrich II. von Virneburg に提出した第一回訴追リストと1236年9月26日以前に、再度提出された第二回訴追リストの一部が収められている。前者はいくつかのテキストの証言から、後者はエックハルトの弁明に基づいて再構成されたものである。訴追者によってラテン文に翻訳されたすべての命題には、知られているかぎり、中高ドイツ文によるオリジナルのテキストが並列的に置かれている。ラテン文テキストは、すでに1923年に刊行された Augustinus Daniels: *Eine lateinische Rechtfertigungsschrift des Meister Eckharts* と内容的にも量的にも基本的には変わらないが、若干の異文がある。

3. ところで Flasch 教授と Sturlese 博士を中心とする ポッフム大学の研究グループは、すでに 1977 年以来、上に挙げた *Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi* と称する一連のテキストの編纂に従事している。このコルプスは、1250年から1350年にかけて、したがってエックハルトの活躍した時期を中心として、ドイツにおいて高度に発達した哲学を展開していた一連の哲学者の従来殆ど刊行されてい

なかったテキストを、初めて編纂しようとするものである。それらの哲学者には、Ulrich von Strassburg, Dietrich von Freiberg, Johannes Picardi von Lichtenberg, Heinrich von Lübeck, Nikolaus von Strassburg, Berthold von Moosburg 等々が含まれる。このコルプスの編纂の意図は、ドミニコ会におけるエックハルトの直接の上長でもあったディートリッヒとエックハルトとの、したがってまたいわゆるドイツ神秘主義との知的なコンテキストを正確に研究することにあるとされている⁹⁾。しかしながら Flasch 教授はこれら一連の哲学者、特にウールリッヒとディートリッヒとエックハルトを、単純に「アルベルトゥス学派」という名称によって括ることは慎重である。われわれは確かにこれらの哲学者を研究することによってアルベルトゥスに至るが、そのアルベルトゥスはさまざまな発展段階と伝統連関の充溢としてのアルベルトゥスであると言われる¹⁰⁾。

いずれにしても以上のような留保つきであるが、Flasch 教授によれば、エックハルトはアルベルトゥスとディートリッヒから甚大な影響を受け、彼等を通じて新プラトン主義の伝統（アウグスティヌス、ディオニシウス・アレオパギタ等々）を学んだ。またアルベルトゥスとディートリッヒの二人は、エックハルトをアヴェロエスに向かわせた。アヴェロエスはアリストテレスからアナクサゴラスの定理、すなわち知性は「混じり気のないもの」であり、「いかなるものとも共通のものを持たない」ということを強調したのであった。私見によっても、事実、近年論議的になっている『パリ討論集』(*Quaestiones Parisienses*)においても、エックハルトは存在 (*esse*) に対する知性 (*intellectus*) ないし知性認識 (*intelligere*) の優位を主張し、神は存在ではなく、知性であり知性認識であると主張しているのである。この点でこれより後のエックハルトの思想的背景を、「パリにおけるラテン・アヴェロエス派の新プラトン主義である」¹¹⁾ とした Grabmann の見解は、それが発表された1927年という時期を考えれば、炯眼であったと言えよう。

ところで Flasch 教授によれば、エックハルトは或る時期はトミストであったが、後にはトマスに対して批判的に距離を開けるようになり、他の地盤の上で動くようになった。すなわちエックハルトは、同じくアルベルトゥスの弟子であったトマスが放棄したアルベルトゥスの思惟の或る側面を強調し、それはまた、同じくアルベルトゥスの弟子であったディートリッヒが反トマスの哲学を構築するに至った側面でもあった。これは非常に複雑な歴史的諸連関であり、そのうちではエックハルト自身はあ

くまでも独立して思惟しながら動いていると意識していたのである。このような歴史的諸連関は従来殆ど知られていなかったものであり、そこからエックハルト解釈は極端に分裂することになったのであり、この点については、特に慎重さとテキストに密着した研究が望まれると言われる¹²⁾。

さらに Flasch 教授によれば、エックハルトを「神秘主義者」と見做すまえに、彼を14世紀初頭の哲学と神学の批判者として位置づけなければならない。エックハルトは、その浩瀚な『ヨハネ福音書注解』の冒頭において、「始めに言があった」というアウクトリタスを説明して次のように言っている。「この言とそれに続くすべての言の解釈においては、著者のすべての著作におけるのと同様に、聖なるキリスト教信仰と両聖書の与えるもろもろの事柄を、哲学者たちの自然的論証によって解釈することが著者の意図である」。重要なのは、エックハルトがここで、これが彼の「すべての」著作における意図であると語っていることである。ここで問題になっているのは、特有の様態の、つまり哲学的論証を用いた聖書解釈である。このことは、アリストテレスの受容やアヴェロエスの議論によって固定された、神学と哲学という両方の学科を分離させるという思想に対立するものである。エックハルトは神学と哲学を結合させようとしたのであり、しかも哲学の側からそれを試みたのである。神によって世界が生じたのも、彼は哲学的に、神と人間との本質的結合の表現として証明しようとした。彼が、キリストが人になったことを哲学的に説明したとき、このことは史的イエスを排除するものではなく、すべての人間が神の子になる可能性を有していることを明らかにしようとしたのである。聖書のなかで知恵を通して単に示唆されているにすぎないものを、エックハルトは自然と道徳の哲学として哲学的に展開したのである。彼は中高ドイツ文テキストにおいてもまた、彼の教説が単に聖書のなかだけではなく、「理性的魂の自然的光においても」確実なものであることを強調した¹³⁾。トマスですら、三位一体や受肉は超自然的事柄に属するものであるとし、エックハルトのこのような企図を拒否したことであろう。

このように、Flasch 教授によれば、エックハルトの展開したのは新しい福音の哲学であったのであり、それは従来、神学として、形而上学として、自然哲学として、倫理学として分離して存在していたものを結合したのである。エックハルトはこうして哲学とキリスト教の協調を論証しようとしたのであるが、その際、彼は哲学もキリスト教もともに変容せしめた。哲学において、彼は存在、真理、善性、義のような第一

規定に属するものの固有の優位性を展開し、これらを、現実存在する物体に付着する諸性質として提示することがどんなに誤っているかを示した。またこれらの第一規定を用いて、彼は神とは何であるのかを説明し、靈魂、特に知性についてのアリストテレス的アヴェロエスの理論を用いて、そのように考えられた神とそのように考えられた靈魂との緊密な関係を示したのである。このようにして彼は魂における神の誕生の哲学を展開し、キリスト教を忠実に把握しようとし、そのことによってまた(当時の)キリスト教をも変容せしめたのである。

4. 以上が Flasch 教授の提出している最も新しいエックハルト像の大枠であるが、同じくポッフム大学の研究グループに属する Burkhard Mojsisch 教授は、このプログラムに沿って、アルベルトゥスとディートリッヒとエックハルトに関する詳細な歴史的研究をモノグラフィーに纏めている¹⁴⁾。

Mojsisch 教授によれば、アルベルトゥスもディートリッヒもエックハルトも、神を絶対的知性として規定し、そのことを人間に固有な認識様態を考察し、知性に関して獲得された知見を、神の知性に应用することを試みた点において一致している。アルベルトゥスによれば、能動知性 (*intellectus agens*) は、神的知性の比較基準として機能するのであり、能動知性の認識様態は、神的知性の生成活動性、すなわち言と子を生むことを理解せしめるのに、最も適しているのである。ディートリッヒもアルベルトゥスと同様に、人間の知性的認識を分析し、知性的なるもの (*intellectivum*) のうちに他の認識様態に優越する機能を認めていたのであり、そのような認識活動は、単一の知性活動、さらには単一の実体としての知性に基づくものであるという。そしてそれらの規定は能動知性に帰せられるのである。

さらに Mojsisch 教授によれば、このようなディートリッヒの能動知性論は、新プラトン主義的な流出理論と結びついて、神的知性からは、もろもろの知性実体と天体の魂が流出してくるのであると言われる。天体の魂とは、天体と本質的な仕方で結合した知性的な実体である。神的知性は知性実体の本質的原因 (*causa essentialis*) であり、知性実体は天体の魂の本質的原因であり、天体の魂は天体の本質的原因である。ここでディートリッヒは彼に固有の本質的原因論を展開している。本質的原因とは、(1)直接にその原因から生じたものの諸本質を産み出すものであり、(2)その原因から生じたものがそれ自体において存在するよりもより卓越した仕方、その原因から生じたものをそれ自身のうちに所有していると言われる。さらに本質的原因は実体 (*sub-*

stantia) であり、生ける実体 (substantia viva) であり、本質的に生ける実体 (substantia viva essentialiter) であり、しかもその際、その生命は知性的生命 (vita intellectualis) であり、これは現実態における知性 (intellectus in actu) であるとされる。これらのすべての条件は、神、知性実体、天体の魂、また人間の能動知性において満たされると言われる¹⁵⁾。

そして Mojsisch 教授によれば、エックハルトはディートリッヒからこの本質的原因論を継承しているが、『ヨハネ福音書注解』の冒頭において「始めに言があった」というアウクトリタスを分析することによって、それを特有の本質的始原 (principium essentiale) 論として展開している。そこでは(1)本質的始原のうちには、結果が原因のうちに含まれているように、本質的始原から生じたものが含まれており、(2)その本質的始原から生じたものは原因のうちにおいては、それがそれ自身においてあるよりも卓越した仕方において存在しており、(3)その本質的始原は純粹の知性であり、そのうちにおいては、いかなるものとも共通のものを持たない知性認識以外のいかなる他のものも存在しないと言われている。そしてこのような本質的原因論、ないし本質的始原論は、エックハルトにとって基本的に構成的意味を持っていたのであり、そのことは『バリ討論集』にも現れているという。こうしてエックハルトは単にアリストテレス的トマスの思惟を進展させたのみならず、方法論的には、アルベルトゥスとディートリッヒのうち哲学史的に重要な範型を有していたのであり、特に彼等の知性論と本質原因論を受容し、さらに拡張したのであるとされる。

しかし Mojsisch 教授のこのような立論に対しては、私見では、いくつかの反論が予想される。まず知性論であるが、エックハルトはたしかに知性に靈魂の最高の能力を認めているが、ディートリッヒに見られるような新プラトン主義的な流出論は、エックハルトのうちには見出されないのみならず、アリストテレス的な能動知性論も積極的な展開を見せていない。つぎに本質的原因論であるが、エックハルトは、管見によれば、『ヨハネ福音書注解』の若干の箇所において、「本質的原因」なる概念を使っているにすぎない。それに対して「本質的始原」ないしは、より一般的に「始原」なる概念はラテン文テキストの重要な箇所、特に『ヨハネ福音書注解』と『創世記注解』の冒頭で頻出するエックハルトの根本概念の一つであり、きわめて深遠な形而上学的意味を賦与されているが、「本質的原因」にはそのような意味は賦与されていないと思われる。エックハルトにおいては、原因と始原とは、その形而上学的意味において異

なるのである¹⁶⁾。したがって筆者には、エックハルトが単純にディートリッヒの本質的原因論を継承し、それを始原論へと発展させたものとは思われないのである。われわれは、このことを確証するためには、エックハルト研究に限定するならば、さしあたり『ヨハネ福音書注解』と『創世記注解』における「始原」の意味を、あくまでテキストに即して明らかにしなくてはならないであろう。

注

- 1) エックハルトの過去の膨大な研究史については、すでに定評のある文献が刊行されている。Ingeborg Degenhardt: *Studien zum Wandel des Eckhartbildes*, Leiden 1967. しかしこれは見方によっては、すでに古くなっており、新しいところでは、Wolfram Malte Fues: *Mystik als Erkenntnis?, Kritische Studien zur Meister-Eckhart-Forschung*, Bonn 1981.
- 2) Meister Eckhart: Die lateinischen Werke, Bd. I, 2, *Prologi in Opus tripartitum et Expositio Libri Genesis* hrsg. von Loris Sturlese, 1.-2. Lieferung, Stuttgart 1987 の裏表紙にこのテキストの簡略な特徴が記されている。詳細な解説と独訳は、この巻が終了した時点で、Sturlese 博士によって付される予定である。なおこの写本についての詳細な報告は、Loris Sturlese: *Un nuovo manoscritto delle opere latine di Eckhart e il suo significato per la ricostruzione del testo e della storia dell'Opus tripartitum*, in: *Albert der Große und die deutsche Dominikanerschule*, hrsg. von Ruedi Imbach und Christoph Flüeler, Sonderdruck aus der *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie*, 32 (1985), Heft 1/2, S. 145-154.
- 3) Meister Eckhart: Die lateinischen Werke, Bd. V, *Sermo Paschalis a. 1294 Parisius habitus; Acta Echardiana*, hrsg. von Loris Sturlese, 3.-4. Lieferung, Stuttgart 1988.
- 4) Th. Kaeppli: *Praedicator monoculus. Semons parisiens de la fin du XIII^e siècle*, in: *Archivum Fratrum Praedicatorum* 27 (1957) S. 120-138.
- 5) Einleitung zu *Magistri Echardi Sermo Paschalis a. 1294 Parisius habitus* in: Meister Eckhart, Die lateinischen Werke, Bd. V, S. 133f..
- 6) Heinrich Denifle: Die Heimat Meister Eckharts, in: *Archiv für Litteratur und Kirchengeschichte des Mittelalters*, Bd. V, S. 349-364; Josef Koch: Kritische Studien zum Leben Meister Eckharts, in: *Archivum Fratrum Praedicatorum* 29 (1959) S. 6ff..
- 7) E. Albrecht: Zur Herkunft Meister Eckharts, in: *Amtsblatt der Evangelisch-*

- Lutherischen Kirche in Thüringen* 31 (1978), S. 28-34.
- 8) Josef Koch: a. a. O. S. 11.
 - 9) *Albert der Große und die deutsche Dominikanerschule*, hrsg. von Ruedi Imbach und Christoph Flüeler, Vorwort von Ruedi Imbach, S. 4.
 - 10) Kurt Flasch: Von Dietrich zu Albert, in: *Albert der Große und die deutsche Dominikanerschule*, S. 24.
 - 11) Martin Grabmann: Neuaufgefundene Pariser Quaestiones Meister Eckharts und ihre Stellung in seinem geistigen Entwicklungsgange, in: *Martin Grabmann, Gesammelte Akademieabhandlungen*, hrsg. von Grabmann-Institut der Universität München, Paderborn/München/Wien/Zürich 1979, S. 327. Grabmann はエックハルト論においては、基本的にはその師である Denifle の見解を継承している。
 - 12) Flasch 教授は、現在までのところエックハルトのモノグラフィーは刊行していない。下記の記述が同教授の手になる最新のエックハルト論である。Kurt Flasch: XII. Teufelssaat oder Philosophie der Gottessohnschaft — Meister Eckharts Selbstverteidigung vor der Inquisition, in: *Einführung in die Philosophie des Mittelalters*, Darmstadt 1987, S. 166-180.
 - 13) Meister Eckhart: Die deutschen Werke, Bd. V., *Daz buoch der goetlichen troestunge*, S. 11.
 - 14) Burkhard Mojsisch: *Meister Eckhart, Analogie, Univozität und Einheit*, Hamburg 1983, S. 23 ff..
 - 15) Burkhard Mojsisch: "Causa essentialis" bei Dietrich von Freiberg und Meister Eckhart, in: *Von Meister Dietrich zu Meister Eckhart*, hrsg. von Kurt Flasch, Hamburg 1984, S. 106-114.
 - 16) Erwin Waldschütz: *Denken und Erfahren des Grundes—Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts*, Wien/Freiburg/Basel 1989, S. 229-234.